

マレビト・ライブ vol.2 「N市民 緑下家の物語②」 上演テキスト

稲光の部屋での対話、虹見江波の二度目の来訪

「緑下くん」

「あ、はい」

「なにをしてるの、さっきから」

「小説を書ってる」

「小説。題名はなんていうの」

「N市民。この街を舞台にしたものを書こうと思って」

「へー。ジョイスを意識したのね」

「え、なに」

「ジョイス。ジェイムズ・ジョイス」

「誰、その人」

「なんにもおれは意識しない。意識して書くことなんてなんにもない」

「虹見さんは、おれの無知を軽蔑してるだろ」

「そんなことないわよ」

「ああ、でも、そんなことを言う、緑下くんの卑屈さは、軽蔑してるかも」

「ちえっ、フィネガンズ・ウェイク以外は全部読んだぜって答えてやれよ。あんなアイリッシュでジャガイモ髭のクズみたいなよりよりチン毛文字の羅列、メニエル氏もびっくりなくっだらねえ眼精疲労のもとだって言ってやれ言ってやれ。チラチラ、チラチラっ、さっさと黒ビールっぽい屁でもかましてろ、ばーか。あ、次男兄さん。こんなことを言うってことは次男兄さんが一瞬戻って来たのかな」

「え、なに、なんか言った？」

「あ、いや」

「次男兄さん。次男兄さん。・・・いない。やっぱ、気のせいかな」

「ねえ、読ませてよ」
「なにを」
「小説。N市民」
「人に読ませるために書いているわけじゃないから」
「人が読まなきゃ、小説なんて自己満足のただの日記じゃない」
「ま、だから、日記のつもりなんだ」
「いいから読ませて」
「いいけど。書き終わったらでいいかな」
「いつ、書き終わるの？」
「さあ、今日、書き始めたばかりだから」
「なんで小説なんか書こうって思ったの？」
「ああ、なんでだろ。最近、次男兄さんがおれのなかに現れてくれなくなったからかな」
「どういう意味？」
「この小説は、語り手がおれなのか、次男兄さんなのか、よくわからないところがある。両方で一人の語り手というか、だから、おれが次男兄さんになって書いているときに、本当の次男兄さんが戻ってくるんじゃないかなって思うんだ」
「ふーん」
「なに言ってるのか、わからないだろ」
「え、うん」
「そうなんだ。みんなよく言うよ。おまえの言っていることは、いつもよくわからないって」

以下、現在、稲光が書いているという小説を引用する

N市民

緑下稲光

私の父、緑下川音は陽の当たる縁側で、木製の工具箱と一緒にいて、母の美濃から頼まれた故障した台所の電灯の電気コードを修理していた。工具箱には使い古しの錆釘がたくさんあった。川音は高校の国語の先生で、その日は日曜日だった。川音も、母の美濃も、このことを書いている私はもう死んだものと思っている。癩だから、私は化けて出るのだ。文字となって。たとえば、川音の、傍の工具箱の中の錆釘になって。それは、「錆釘」とキーボードを打てば錆釘にでもなれる気がするからだ。しかし、川音も美濃も、私に気付いてはくれないのだ。死の

眠りから醒めるとすればこういう感じのことになるのだと思う。眠っているあいだに書き手の人がなにかを書いているということが私の驚きとしてある。父も母も、私の密やかな営み、この場合彼らに気付かれないで、私の眼差しと書いている仕種が続行しているということだけど、に気付かれないでいるということが何より大事なことのように思われてならない。

私には弟がいる。弟は生きている。弟の名前は稲光と言う。稲光は自転車に乗って坂の斜面を走った。街へ降りて行く感じがした。のぼるのが大変な坂の街で、緑下家は急な石段をのぼった所にあった。稲光はよく友だちと自転車で、父の勤める工業学校へ行き、その近くを流れる大きな川で遊んだ。ムラサキツユクサの葉の断面を顕微鏡で見るための永久プレパラートを作った。弟のことはよくわかる。弟の目と等しいということもある。文字となり見られているのは私で見ているのは弟だと思う。そのような意味からも、文字を私と一緒に打つ弟とがここにいる気がする。つまり、私を文字化してくれているのは弟稲光であった。私は生まれてすぐに死に、すぐといっても、いくらかは息をしたらしくそんな私を不憫に思ったらしい母が父に私の名前をせがんだ。

美濃（母）「この子にも、あなた、名前を」

川音（父）「次男」

美濃「つぎお。つぎおですか」

名前があらわれると私もある気がする。その私のことと稲光のことをこれから語るのだ。はたして私と稲光のことをそんな同時に書くことができるだろうかと言いつつも。

だけど、いや、だから、かな、とにかく、ややこしいので、私は稲光として、書く。稲光になってというか。生きているほうが書けばいいんだ。ただ、私がこうして書くときにも、次男兄さんの目が私の目とともにあるようで、次男兄さんっぽい空気感が漂っている。このことはとても大事なことだと思う。私がなにかをしているときには兄さんとともにある気がするし、私のすることは兄さんのすることでもある。自慰行為なんかするときにも次男兄さんが、「お前、またしたんか」と言う。でも、それはそれで、そういうことも覚える間もなく死んだ次男兄さんにとっては新鮮な快感ではなかったろうか。それとも、新鮮なはずがあるもんかお前、お前のように何回もしたらお前新鮮なことがあるもんか、そのようにお前、なんかいいもんか、お前、ああ、お前、はよう、本当の女とやれよ、と次男兄さんは言うのだろうか。

「次男」というセカンド的な名前なのはその上にも兄がいるからだ。長男の陽である。陽を私は苦手になっている。そのあたりのことを、次男兄さんと話してみたことがある。傍目からすると独り言にしか聞えないのだけれど。

「稲光」

「なに」

「お前、陽兄さんのことが嫌いなんか」

「嫌いじゃ」
「なんで」
「嫌いっていうか。苦手なんかな」
「そうか」
「次男兄さんはどうなの」
「陽兄さんのちんぽはおおきいぞ」
「ちんぽの話はしとらんぞ」
「そうか」
「そうだなあ、気が合わんというか。話ができないっていうか」
「なにがそうさせるのだろうか」
「気分の問題かなあ」
「ちえつ、気分なんて糞だな」
「なんすか」
「気分なんて糞だ」
「や、やめろう」
「なんで、なんか、落ち込むのか」
「そうじゃないけどさ」
「け、せんずり主義者」
(中断)

稲光の部屋での対話、虹見江波の二度目の来訪、の続き

「緑下くん」
「あ、はい」
「今日も、する？この部屋で。このきったないベッドで」
「え、ああ」
「この前、ここで、ものすごいセックスをしたわ。私たち」

「今日は、二度目。緑下くんの部屋への二度目の来訪。そう、二度目の来訪ってとっても大事。この街が被爆したのだから、世界で二度目のことだったし、どんなことでも、二度目があると三度目もあるって思うもの。ね、そうでしょう。一度目があって、二度目でやらなければ、三度目があるかどうかはわからないけれど。一度目やって二度目もやったら、三度目以降も必ず

やるってことになるじゃない。なんか、そういう、判断の境目にあるんだと思う、私たち」

「でも、その、一度目のセックスに覚えがないって言うんでしょう？」

「そうです」

「緑下くん、それは一体どういうことなのかな」

「おそらく、これは次男兄さんの仕業なんだ」

「出た、また、次男兄さん！」

「ものすごいわって言ったけど、緑下くんの射精の量がハンパなかったってことで、私にとってはものすごくもなんともなかった。大きな声を出したのも演技だったし、ただただ私の顔中をべっとべとにして、屈辱を味あわせて、それで、つまりは、緑下くんはAVのようなセックスのことを忠実に模倣したにすぎない。で、それだって、死んだお兄さんがしでかしたことで、自分には自覚がないって言うのなら、そんなに都合のいい話はないと思うわ」

「正確に言うとき、なんて言うか、次男兄さんは普通の意味で死んだんじゃないで、生まれて三時間で死んだわけだから、生まれたのか生まれそこなったのかよくわからないところがある」

「いいのそんなの。まったくどうでもいいの、あんたんちの事情なんて」

「なんかさ、こう、ザーメンの量がとめどもないってのは、ある意味、人権問題っていうか、人間離れしてるって意味では、動物なみってことで、緑下くんは差別対象にされてもいいってことじゃないのかな」

「え。いや、そうかな」

「そうよ。私は、息もできなかつたんだから」

「だから、それは、おれじゃないから」

「ぎゃ、逃げんのかよ」

「逃げるもなにも、おれには本当に覚えがないんだって」

「ね。ちょっと。背中に、蹴りいれるわよ」

「このまま、私たち、二度目があって、三度目以降もお約束のようにあって、そうしてるうちに緑下くん、きっと私のことを周囲にこうもらすようになる。あいつはおれのこれがよくなって離れられないんだってさ。げー」

「地位も学歴もない。金もない。才能だってないから、書いた小説が認められるわけでもない。平凡で貧乏極まりないって奴でも、あれだけほうまくてっていう典型的なパターンじゃない。そんな男がいちばん反吐が出る。きみも、女だけはなんとかつなぎとめておこうってことなんだろうけど、私、そんなのに乗るつもりないから」

「身に覚えのないことで、ここまで言われるのも、酷な話ね。じゃ、やっぱりあれは、お兄さんだったのかな。なんか、そんな気がしてきた。ま、どっちだっていいんだけどさ」

稲光のアパートを出てからの、稲光と江波の対話

「ちょっと待って」

「私たち、境目だって言ったでしょ。もうしばらく、この境目を持続してみましよう。あ、それから、一度目のとき次男さんが変なこと言ってたわ。聞きたい？」

「え。次男って」

「お兄さんなんでしょう。あれは、あなたじゃなくって。ああ、でも、その口からだったけど。変なこと言ったのは。聞きたい。それとも、聞きたくない？」

「聞きたい」

「緑下くん、お姉さんいるの？」

「いるけど」

「ああ。やっぱりいるのか」

「え、なんて言ったの、兄さんは」

「稲光は、姉さんとやることばかりを考えてるって言ってた」

「ええ！」

「変態」

「そんなこと言うはずないだろ」

「そんな、変なこと言うわけないだろ」

アパートの前、虹見江波の後ろ姿を見ながらの、稲光のひとり言

「街が火事になるたび、おれたち三人は、火事の現場に駆けつける。それからおれは陽兄さんの巨大なちんぼを持ってふりまわし、次男兄さんの霊力をこめて、放水するんだ。そうすると、たちまちのうちにどんな火事も鎮火する。でも、誰もおれたちの仕業だとは気付いてはいない。ふふふ。それでいい、それでいいんだ。でも、霊界新聞の一面トップで報じられているはず、こんなふうには、火事は緑下三兄弟のちんぼで鎮火。ふふふ」

ハマノ町の居酒屋ミックで緑下陽はマリーに会う。すると、見知らぬ男が話しかけてくる。

「マリー」

「あ、陽くん、どうしたの」

「ちょっと、近くまで来たんで、寄ってみようかなって思って」

「なんか飲む」

「うん」

「こんにちは」

「え、あんた、誰」

「こないだ。映画の撮影してたでしょう。カジヤ町の角から坂あがったところで」

「ああ」

「見てました。走ってましたね」

「うん」

「刑事ドラマかなんかですか」

「うん」

「へー。じゃ、刑事さんですか」

「うん？」

「刑事の役だったんですか」

「うん。まあね」

「映画、できたら見せてくださいね」

「ああ。いいよ」

「名前なんて言うんですか？」

「え、おれの」

「教えてください」

「なんで」

「私は、ファンです。あなたの」

「ファン」

「ファンです」

「いや、別に、おれ、ああいうことを生業にしてるわけじゃないから。こないだはちょっと誘われてやっただけだから。走れって言われて走っただけだから」

「写真撮っていいですか」

「やめてくれよ」

「マリー」

「なに」

「あれから、どうしたの。あいつら、一緒に帰ったみたいだったけど」

「稲光さんと江波？」

「うん」

「江波、稲光さんの部屋に泊まったみたいだけど」

「あ、そう。へー」

「大丈夫かな、稲光、あいつまだ、女とつきあったことなんてないと思うんだけどさ」

「あなたは、いまさっき、そこんところで、立っていましたね。N市民に告ぐ。売国奴の市長をN市から追放せよ。陛下の戦争責任に賛同した、市議会議員もみな非国民である。処分せよ。さもなくば、われらは、卑怯どもらに、神に代わって天誅を下すって、叫んでましたね」

「世直しですか。あれは、世直しですね。私は、ますますあなたのファンになりました。だから、私の願いを聞いてください。これも、世直しだと思って。私にはつきあっている女がいます。ミサエと言います。子供ができましたが、ミサエは子供をほっといてほかの男と毎晩飲みに出掛けて行きます。ミサエは子供を育てようとしません。そんな奴はこの世に生きていても仕方ないと思うわけですよ。母親になろうとせず遊びまわってばかりいるわけですから。あげくに子供にも暴力ですよ。風呂からあがったら、このへんとか痣だらけでびっくりです。ミサエの仕業です。子供もほんと可哀想です。この世に生まれて来るべきじゃなかったって思っています、きっと、まだ二歳ですけど、私にはわかります、そんな目で訴えて来ますもん。

だから、まだ二歳のうちになんとかしてやりたいんですよ。なんとなんとかって言うのは、つまり、ここからが、あなたの世直しに期待するところなんです、こう、なんというか、単刀直入に申し上げますが、子供もろともですね、ミサエをこの世から抹消してほしいというか、ま、殺して欲しいというか、できませんかね、事故かなんかに見せかけてですね。ミサエと子供をですね、子供もろともですね、むぎゅって。いきませんかね。なんかこう、どうにかありませんかね」

「ちょっと、マリー、この人どうかしてるよ」

「そうね」

「いかれてるよ」

「写真撮っていいですか」

「やめてくれよ」

「すいません」

めまいを分ち合う女が突然めまいを起こす

「あ」

「大丈夫ですか」

「わたしはいま、あなたたちと、この、めまいを、分ち合いたい」

「え、でも、めまいをどのようにして、分かち合えばいいのですか」

「あ。あなた」

「あ、はい」

「思い出しました。わたしは、いま、確かに思い出しました。あなたは、いつぞやの公園で、もう一人の男の人を、思い切り引きずり倒しましたね」

「え、ああ、そうだったかな」

「そうでした。私、覚えています。あれは、あの人は誰だったのでしょうか」

「おれの弟です」

「あなたの弟さん。でも、そのときはもう、あの人はあなたの兄弟ではなかったのです。あの人は、大地に引きずり倒された人でしかありませんでした。私は、その引きずり倒された男の人にリルケの噴水という詩を読んであげました。あなたは、善きサマリア人のたとえ話を知っ

ていますか」

「いえ、知りません」

「そうですか。いま、ここで、話しましょうか」

「え、あ、いや」

「そうですか。・・・つまり、そのとき私は、善きサマリア人のようなものでした」

「人が、地面によこたわるということはどういうことでしょうか。私は、眠れないときの夜の闇のことを思い起こします。目をつむっても、目をつむっても、ずっと夜の闇です。夜が覆い被さって来ます。そのとき、私は思います。ずっとこのまま眠れない私が、こんな私のままで続いて行くのだと。気が狂うほどに私だけで、私が続くのだと。逃げられません、私から。というか、もはや、私でさえ、ないような私なんです。よこたわる身体から、私は逃げ出したいの逃げ出せない。・・・私はあきらめます。すると、私がすうっと消えて、私が私じゃないような、身体に落ち着きます。そのときです、私は、誰でもないような感じで、ある、と思うんです。いや、そのときそう思うんじゃなくて、あとで、たとえば、いまですが、そうあのときの感じを振りかえって、そう思えるんです」

「マリー」

「なに」

「おれ、仕事いかなきゃ」

「あ、そう」

「じゃ」

「あとでメールする」

「わかった」

「陽くん」

「あ、はい」

「私が、この後送る、メールはとっても大事なことが書かれた文面になると思うわ。だから、ちゃんと読んでね」

「うん」

N市街を見下ろすビルの屋上で、ユミ姉さんは、まるで弟稲光の幻想に应じるようにひとり言をつぶやいている

「陽が沈む少し前の時間に速いスピードで自転車をこいでいると、目の高さにコウモリがやって来て、ボクサーのようによけて走る。顔にはいっぱい虫がくっついた」

「夜中に私が目を覚ますと、ワイン色のガウンを着てカーラーを沢山巻いた頭をネットでつつみ、パックで真っ白にした顔に逆三角のとんがった眼鏡をかけたお母さんが、なんなの、と睨むので恐ろしかった」

「手すりやスロープを見ると私はどうにかして遊具に代えたくて身体を乗っけてすべり台にしたり、ぶらさがったり、のぼったりするのだった」

「昔見た飛べる夢は、ラ・セーヌの星の主人公をテレビで見たのが始まりで、夢の中での飛び方がかわった今も、昔の飛び方に憧れる」

「うちで飼っていた犬ポチを珍しく二軒隣のおじさんが散歩に連れて行ってくれたので、つい行ってみると、近所の工事中の空き地の、土の盛り上がったてっぺんにおじさんが立って軸になり、走れー走れーと斜面のきつい円周をポチが走らされて、口に土をつけながらフガフガ言っているのを見て、なんとも可哀想でならなかった。とめればよかったな」

「キムラのおじさんは関西方面から来た人らしく、おっちゃんナナハンのバイク乗ってんねんで、乗けたろけ、と言うのでよく乗せてもらった。キムラのおじさんのヤンキー走りはジェットコースターみたいに怖くて面白かった」

「従姉妹たち田舎の島に集まって、そこには小さな葉っぱで水面が見えなくなった井戸のような小さな池があって、みんな代わりばんこにはまってしまい、緑に染まった脚や身体をよく見た。そばにはたくさん川があって私はそこでよく小枝サイズの棒っ切れによくくっつかれた。取ろうとするとにゅるっとして取れない。ひつこく頑張ると途中で切れたりする。やっと取れると血を出していて驚いた」

「友だちの家が団地で、団地にとっても憧れた。同じ形の建物の中に必ず公園は挟まっている。公園付き住宅。よく泊まりに行って友だちをガイドに制覇した」

「小学校に中並五月ちゃんという転校生が来て、その子とよく遊んだ。さっちゃんは福岡の飯塚というところの出身で、飯塚がどこなのかもわからない私によく飯塚の話をしてくれた。さっちゃんちはいつも子供だけで自由だった。私は暗いマンションの部屋の入り口をひとり訪ねて行くのがとても心地よかった。大人の気分だったのだろうか」

「少年柔道に通っていたころ、一緒に行っていた弟の陽が一輪車に熱狂して、道場まで一輪車で通いだした。マンガも好きで、遂に道着を背負ってマンガを読みながら一輪車で通えるようになった。ゆうらゆうらと夕日に照らされる陽のシルエットは姉としては誇らしくもあり、少しはかしくもあった」